



流

芳

復刻版・全8巻・付録1

「日本のデンマーク」愛知県碧海郡
安城町の愛知県立安城農林学校同窓
会（流芳会）発行『流芳』の復刻版。

一九二五（大正14年）→一九四三年（昭和18年）

「農聖」山崎延吉の指導の下、多くの人材を県内外に送り出した同校は、地域社会の中心的な担い手、又農政の中堅をつくる教育機関として大きな役割をはたした。従って『流芳』は、地方の農学校の単なる同窓会会誌にとどまらず、昭和前期の農村社会・農業（教育）等の基本的文献でもある。本復刻版は、同窓会各位の協力の下、日本農政の歴史と今後に興味ある研究者・農民に贈る書である。

●推薦——伊藤喜雄 今村奈良臣 梶井 功 武田 勉

石原久邇雄 村田重一 真木 勲 神谷素光
日下 務 堀尾 巖 稲垣恒夫

●概要——A5判・上製本・総5、732頁・解説付

●揃価——80,000円

不二出版（株）



『流芳』復刻の辞

『流芳』は、「日本のデンマーク」とうたわれた愛知県碧海郡安城町の愛知県立安城農林学校同窓会『流芳会』が、一九二五（大正一四）年に発刊した農業雑誌である。

戦前においては農学校・農林学校は、地域社会の中心にない手、あるいは農政の中堅的なない手をつくる教育機関として大きな役割をはたしていた。一九〇一（明治三四）年、愛知県立農林学校として設立された愛知県立安城農林学校は、そうした農学校・農林学校のなかでも代表的なものであった。

同校は、「農聖」とうたわれ、農業指導者としての名声をほしきままにした我農生・山崎延吉の指導のもとに、多くの人材を県内外に送り出した。そうした同窓生たちが、第一次世界大戦後の農村社会の衰退・沈滞のなかで、それを憂えて発刊したのが、この『流芳』であった。内容は、会員による農政・農業・農村社会・農村教育などについての記事が主であり、また山崎延吉、加藤完治など同校関係者によるものも少なくない。そしてこの雑誌は、地方の一農学校同窓会の会誌にとどまらず、昭和前期の地方社会の実態とそこでの人々の意識を生々しくうかがわせる、貴重なものとなっている。その意味で、ここに復刻して、ひろく昭和前期の農村社会・農業・農業教育等々に興味をもつ研究者・研究機関・教育機関の利用を仰ぎたい。

○『流芳』復刻版への推薦文（五十首順）

地域社会の歴史を伝える資料

伊藤喜雄・信州大学教授

「安城農林」の名は、昭和二〇年に新潟県立新発田農学校へ入学した当時の私も知っていた。「日本のデンマーク」といわれた農業地帯にあって、それを担った農業者を育てている学校として、又数ある日本の「農学校」のトップにある学校として、その名は新潟県の田舎の少年にまで知られていたのである。

その数ある各地の「農学校」は、安城農林ほどではないにしても、地域々々の指導的な農業者を育て、又、県庁、町村役場、各種団体等の幹部職員を供給していた。その「重味」は、今でも地域社会に色濃く残っていると考えてよい。そして、そうした人びとは、多かれ少なかれ「安城農林」という名に、私同様の感懐を抱くことであらう。

その感懐を私情といってしまえばそれまでだが、しかしそれだけでは片付けきれないさまざまな歴史がそこにはこめられている。そのさまざまな歴史が、ありのままの姿で自から語っているのが、この『流芳』である。

「安城農林同窓会誌」という枠をこえて、それぞれの地域や時代の現実の姿として『流芳』は読まれることであらう。主として明治生まれの人を執筆者とし、大正生まれの人びとと読者とした本誌であるが、昭和初期生まれの私にとっても、本誌に書かれていることは現実そのものといってよい。すでに歴史となった現実かもしれないが、若い読者にもそうした読み方を望みたいものである。

現代に生きる英知

今村奈良臣・東京大学教授

農業は人間の英知を集積しながら発展を遂げてきた。今様に言えば、他の産業に較べてすぐれて知識集約産業である。

安城市を中心にした碧海地域の農業が、都市化・工業化の波に洗われつつも、なお、その活力を失わず、常に新たな展開を見せている秘密はどこにあるのか、と常々考えている。

その秘密は、英知の伝統にあるのではないか、というのが私の考えである。そして、英知の伝統の象徴的存在が安城農林学校だとも思っている。

だが、英知の伝統などというものは、そう簡単に全体像がつかめるものではない。

今回、復刻されることになった雑誌『流芳』は、その英知の伝統を、一部ではあっても、確かな手ごたえで、現代のわれわれに伝えてくれるように思う。『流芳』は、安城農林学校の同窓会の機関誌として大正末期から第二次大戦中にかけて発刊されたが、それは単なる同窓会機関誌という内容のものではない。変転きわまりなかったこの時代の農業・農村の実情と思潮をリアルに伝えてくれるとともに、その時代に生きた指導者層の指導理念としてまた苦悩の跡を伝える、貴重な出版物であった。『流芳』とは、「流れ千載に芳し」という意味である。この時代の英知は、現代においてもなお脈々と芳香を放っている、と言い代えてもよい。先人の英知の中から、明日の生きる糧をつかみとるためにも、『流芳』の復刻を共に喜びたいと思う。

秀れた農業指導者をえて

梶井 功・東京農工大学教授

「甲種農学校に於けるもの多くは、四箇年の高等小学校を卒業したるものを入学せしむる規定を設け、法文の上には如何にも立派に定めあるも、事の実際に至りては……師範学校、中学校」両者の入学試験に落第したる所謂落武者連を収容したる、劣等の学識より外なきのみ……故に子弟も父兄も卒業後の有様に呆れて、農学校の方には見向きもせず、その門前に雀羅を張り、中学校の門前のみ常に市をなすもの、豈偶然ならんや」

これは、安城市に愛知県立農林学校が設立されたその年に書かれた織田又太郎の論文「中等農業教育に就いて」のなかにあった文章である。織田ばかりでなく、横井時敬もこのころ同じようなことを問題にしている（明治三二年「地方農学校振興策」）。そういう論議のなかでスタートしただけに、どういう学校になるか愛知県立農林学校は注目されたことであらう。が、この学校は校長に山崎延吉を得て、「雀羅を張るようなことはなかった。愛知県下のみならず、全国各地にまさに「むら」の農業指導者というにふさわしい人材を供給したことはよく知られて

の私にとつても、本誌に書かれていることは現実そのものといつてよい。すでに歴史となった現実かもしれないが、若い読者にもそうした読み方を望みたいものである。

現代に生きる英知

今村奈良臣 ●東京大学教授

農業は人間の英知を集積しながら発展を遂げてきた。今様に言えば、他の産業に較べてすぐれて知識集約産業である。

安城市を中心にした碧海地域の農業が、都市化・工業化の波に洗われつつも、なお、その活力を失わず、常に新たな展開を見せている秘密はどこにあるのか、と常々考えている。

その秘密は、英知の伝統にあるのではないか、というのが私の考えである。そして、英知の伝統の象徴的存在が安城農林学校だとも思っている。

だが、英知の伝統などというものは、そう簡単に全体像がつかめるものではない。

今回、復刻されることになった雑誌『流芳』は、その英知の伝統を、一部ではあつても、確かな手ごたえで、現代のわれわれに伝えてくれるように思う。『流芳』は、安城農林学校の同窓会の機関誌として大正末期から第二次大戦中にかけて発刊されたが、それは単なる同窓会機関誌という内容のものではない。変転きわまりなかったこの時代の農業・農村の実情と思潮をリアルに伝えてくれるとともに、その時代に生きた指導者層の指導理念としてまた苦悩の跡を伝える、貴重な出版物であつた。『流芳』とは、「流れ千載に芳し」という意味である。この時代の英知は、現代においてもなお脈々と芳香を放っている、と言い代えてもよい。先人の英知の中から、明日の生きる糧をつかみとるためにも、『流芳』の復刻を共に喜びたいと思う。

秀れた農業指導者をえて

梶井 功 ●東京農工大学教授

「甲種農学校に於けるものの多くは、四箇年の高等小学校を卒業したるものを入学せしむる規定を設け、法文の上には如何にも立派に定めあるも、事の実際に至りては……師範学校、中学校」両者の入学試験に落第したる所謂落武者連を収容したる、劣等の学識より外なきのみ……故に子弟も父兄も卒業後の有様に呆れて、農学校の方には見向きもせず、その門前に雀羅を張り、中学校の門前のみ常に市をなすもの、豈偶然なら尤や」

これは、安城市に愛知県立農林学校が設立されたその年に書かれた織田又太郎の論文「中等農業教育に就いて」のなかにあつた文章である。織田ばかりでなく、横井時敬もこのころ同じようなことを問題にしている(明治三二年「地方農学校振興策」)。そういう論議のなかでスタートしただけに、どういう学校になるか愛知県立農林学校は注目されたことであろう。が、この学校は校長に山崎延吉を得て、「雀羅を張るようなことはなかった。愛知県下のみならず、全国各地にまさに「むら」の農業指導者というにふさわしい人材を供給したことはよく知られている。

その学校の同窓会報『流芳』が復刻される。同窓会発行とはいえ、これは月刊の農業雑誌でもあつた。こういう雑誌を刊行し続けたこと自体が、この学校の教育の質の高さを示す。日本農業が窒息死させられようとしている今、この先輩たちの叫びを、一人でも多くの人が読み返してもらいたい。

山崎延吉と門下生の情熱を伝える

武田 勉 ●鯉淵学園講師

我農生・山崎延吉の自治と自立の教育理念に培われ、数多く地域農業の指導的人材を薫育して地元愛知県碧海郡は無論のこと全国各地に送りだし名声を高めた安城農林学校の同窓会編集の『流芳』が、今般関係者の期待裏に代表稲垣恒夫氏の熱意による肝入りで、復刻されることは、温故知新とはいえ現在学ぶことが多く時宜に適したものである。

『流芳』は並みの同窓会報とは異なり、歴然とした月刊雑誌で刊行時期も大正十四年から二十年間にわたる。その創刊時は経済不況と小作争議の最中で農村社会は大揺れの死活問題に直面していた状況に対し、卒業生は自分たちの意見交換の場として雑誌を発行した。最近小生は我農生ゆかりの当地を訪ね、高弟稲垣稔の思想と行動の軌跡に触れる機会があつたが、その節実感したのは山崎門下生たちの多様な個性的活動と人脈の厚さであつた。

『流芳』の執筆者は学校内外者を含くみ多彩であるが、門下生たちの地方文化を農業で築く情熱とその輪の地域や世代を超えた継承や拡大を抜きにしては本質は語れないであろう。この雑誌は戦前の農村社会の実態とその社会の中心を形成した農学校卒業生の意識を生々しく現在に伝える史料として、歴史的な意味をもつと同時に現在の地域社会の在り方についても学ぼうるものが少くない。借越ながら各位に自信を以て推薦する所以である。

●石原久邇雄 ●愛知県立安城農林高等学校校長

農業教育の精神は温故知新に象徴される。『流芳』はその良き資料。

●村田重一 ●元安城農林学校校長／第28回・農科卒

安城農林学校の良き伝統を、一人でも多くの人に知ってもらいたい。

●真木 勲 ●安城農林学校同窓会会長／第30回・林科卒

商工業中心の産業構造の中に呻吟する農業に大きな示唆を与える。

●岩井一男 ●安城市農協組合長／第31回・農科卒

戦前の⑨産業組合運動を担った安城農林の歴史を記録するために。

●神谷素光 ●安城市文化財保護専門委員／第41回・農科卒

「農業雑誌」と銘うった本誌は山崎先生の教育理念の一翼を担う。

●日下 務 ●明治用水土地改良区理事長／第48回・畜産科卒

「日本のデンマーク」のほころべき伝統を次世代に伝える資料。

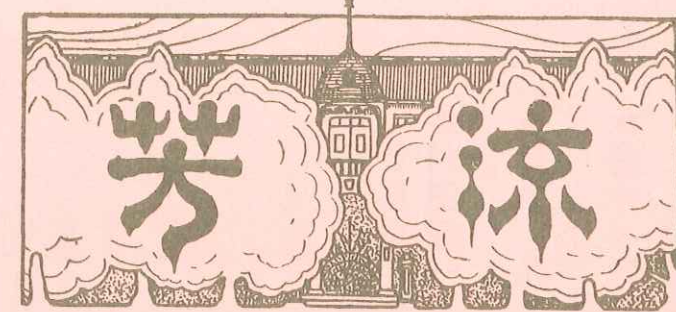
●堀尾 巖 ●安城市経済環境部長／第48回・畜産科卒

「地方の時代」に、地域社会がその過去の遺産から学ぶために。

●稲垣恒夫 ●『流芳』復刻版刊行会代表／第51回・農科卒

山崎延吉先生最後の門下生として、喜びにたえません。

大正十四年三月一日発行
愛知縣立安城農林学校同窓会機関誌
第一号第一卷
（昭和十四年三月一日発行）

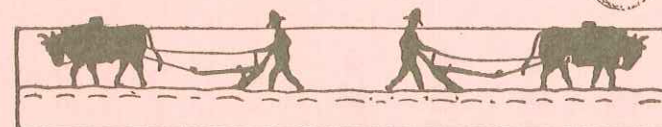


第一号第一卷

目次	
論説	世に立つ道……山崎延吉
偶感	農村振興と教育……大森謹平
国民経済上より見たる奢侈	野村勝三郎
研究	我國農業団体の趨勢……渡邊信治
農業簿記の年度始に就て	野村國市
農家經濟調査……全	
小作爭議と竹林	榎原益良
農民心理の研究	古谷文一郎
消息	僕の現在及將來……山崎延吉
三百卵鶏三河種	加藤貞治
珍奇なる鳥糞	碧山生
葉栗組合	伴常次
雜纂	

愛知縣立安城農林学校同窓会

流芳館發行



短評 我農生

←第2巻第11号（大正15年11月）より

第二号
第十号

安城農林学校といへば、誰れ知らぬものもない様になった、愛知縣立農林学校は正に創立第廿五週年を迎へる事になった。月日の経過の早い事に驚き、頭が禿げ髭が白くなつて來た自分の姿に、成程さすつく事も出来る。
卒業生は二千人近く出た、随分奇抜な人もあり、偉い男もある、と云ふが即ち安城農林の特色である。然し之れは何時までつゞくかは疑問であり、問題であるとする。
安城に來た先生にも、餘程變はつた人があつた、偉い人もあつた。而も到處に

同窓會が組織され、思はぬ所で思はぬ人に廻はり遇ふ事が出来るのは、恐らく他に於ては稀有の事であらう。農林学校は目下舊校舍が改造されつゝあるので、餘程の混雜を來たしてゐる。名物の運動會も之がために出來ぬ、記念式だといふに出來ぬといふは残念な事である。學校は出來れば、鐵筋コンクリートの堂々たるものであるといふが、職員生徒の腕に鐵筋があるや否やを疑はれぬ様にするが肝要である。
農林には二十五年間の在職者栗原氏が、今尙我々乎として在勤して居られる。佛栗原で通つた人はごあつて、今は押しも押されぬ農林の本尊様である。斯る本尊を有する學校は、蓋し稀有であらう。農林學校は幸であり、光榮ありである。
小使の淺井君は老衰して今は止めて居るが其息子に勤めて居る。父子相續して同一の學校に勤むるも亦稀有である。農林のよい所は其邊にある事を、誰れでも忘れてならぬと、敢て云ふ。
師弟の間に情誼あり、同窓の間に互助の心があり、正義の爲には直言して憚らぬ所がある、蓋し農林の特色であらう。此美風は永遠に保存して置きたい、今創立第廿五週年を迎へるに當り、感激無量であるは獨り僕ばかりではあるまい。衷心よりして、農林の彌榮を祈る

愛知縣立安城農林学校同窓会機関誌

流芳

(りやうほう)

全8巻・付録1 復刻版

刊行概要

- 第1巻——大正14→15年 742頁
- 第2巻——昭和2→3年 764頁
- 第3巻——昭和4→5年 698頁
- 第4巻——昭和6→7年 796頁
- 第5巻——昭和8→9年 750頁
- 第6巻——昭和10→11年 624頁
- 第7巻——昭和12→14年 732頁
- 第8巻——昭和15→18年 626頁
- 付録——解説・総目次・索引（分売可1,000円）

復刻版概要

- 解説——『流芳』復刻版刊行会（岡田洋司）
- 刊行——'87年8月
- 概要——A5判・上製本・総5,732頁
- 定価——全8巻付録1揃価800,000円

既刊図書のご案内

清明心 全5巻・別冊1
●稲垣 稔編・稲垣恒夫 監修
●B5・B6判・上製・総1,820頁
●定価3,800円 千300

天乃蒼 (てんのそう)
●稲垣 稔著/A5判・上製・180頁
●定価3,800円 千300

農村青年II 稲垣 稔
——大正デモクラシーと（土）の思想
●岡田洋司 著/四六判・上製・364頁
●定価2,200円 千300

碧海郡依佐美村・野田農民組合関係史料集
●地域研究会 編
●定価2,000円 千250

農村の新教育 全村学校
●山崎延吉・稲垣 稔 共著
●B6判・上製・517頁
●定価4,500円 千300

百姓の見たソ連 増補版
●斉藤宏一著/稲垣恒夫監修
●四六判・並製・380頁
●定価2,000円 千300

不二出版

東京都文京区本郷五丁目三十三
電話〇三三二一四四三三
FAX〇三三二一四四六四
振替（東京）六九四〇八四